

▶「国際金属歴史フォーラムしまね」参加見聞録◀

名古屋工業大学材料工学科 山口 周

1996年1月16～17日、島根県松江市のくにびきメッセを会場に、「国際金属歴史フォーラムしまね」（日本金属学会主催、日本鉄鋼協会他後援）が開催された。このフォーラムは、1998年5月に松江市で開かれる第4回国際金属歴史会議（BUMA-IV）の、いわば準備のためのフォーラムであり、国内外の著名な研究者13名の招待講演が行われた。実行委員会会長の今井勇之進先生（東北大学名誉教授）はご都合により参加されなかったが、副会長の井口泰孝先生（東北大学教授）、幹事の田口勇先生（専修大学教授）を中心とする実行委員会及びボランティアスタッフによって実施され、様々な分野から100名ほどの参加者があった。その内訳をみると、歴史・考古学の専門家、現役の金属・鉄鋼関係の研究者、技術者やそのOBだけでなく、金属の歴史に関心を持つ一般の人たちも数多く見受けられ、金属の歴史への関心の高まりを感じさせられた。

招待講演は、この国際金属歴史会議の提唱者の一人でもあるR. Muddin 先生による「鉄の進歩と発展の歴史」から始まり、以下のような内容であった。

講演者	所属	講演題目
Robert Muddin	ペンシルバニア大学・ハーバード大学名誉教授	鉄の進歩と発展の歴史
Brian Gilmour	王立武具博物館主任研究員	模様をもつ刀剣 一 中世のヨーロッパならびに南アジアの刀剣製作技術
Paul T. Craddock (B. Gilmour 代読)	大英博物館	日本の色金（いろがね）技法の原形
Cristian Segebede	素材研究所	ヨーロッパのダマスコ模様鋼鉄器について
Lars F. Stevnik	トロント大学教授	鉄生産と社会—ノルウェーの先史時代を例として
河瀬正利	広島大学助教授	前近代日本の鉄生産
Michael R. Notis	リーハイ大学教授	日本の金工技法の様式美とその国際技術交流について
Tom Chase	スミソニアン博物館主任研究員	金属組織から見た中国青銅器
Fulvia Lo Schiavo	文化遺産環境省主任研究員	銀の考古学
Choi Ju (崔 火主)	韓国科学技術研究院研究委員	朝鮮青銅器時代の特徴
Chen Tiemei (陳 鉄梅)	北京大学教授	北京大学における加速器を用いた放射性炭素年代測定と古代冶金史への応用
Han Rubin (韓 汝王分)	北京科学技術大学教授	中国古代鉄溶鋳炉の発展
馬淵久夫	東京国立文化財研究所名誉研究員	鉛同位体法による日本国出土青銅器の研究—荒神谷遺跡の場合

これらの講演は、最新の研究成果をまとめたものであり、いずれも学術的に高い水準のものであった。金属・鉄鋼に関係しているはずの筆者が、いかにその歴史を知らずにいたかということを痛感させられた。特に1980年代以降の中国における発掘調査の進展は目を見張るものがあり、日本の古墳時代以前にすでに溶鉄を生産していたという事実には驚かされるとともに、またなぜその技術が日本に伝来しなかったのかといった疑問などがわき起こり、ある種のカルチャーショックに似た衝撃を受けた。また、考古学上の争点となっている遺跡から出土するスラグが製錬スラグか鍛冶フラックスかという点で、文化系（考古学）と自然科学系（主に分析）の立場で見解が異なることなど、現代の鉄の研究者が貢献できる可能性を知ったことも収穫であった。また、先史時代から技術の伝承や普及、技術の栄枯盛衰が市場原理にしたがっているという点も理解することができたように思う。

18日には、引き続きフォーラムのフィールドワークが「鉄のコース」と「銀と銅のコース」とに分かれて実施された。それぞれのコースでは、復元された「日刀保たたら」操業の見学や、荒神谷遺跡および石見銀山の見学が行われ、好評であった。このフォーラムは、様々なバックグラウンドと専門的知識のレベルの異なる参加者が集まったということからも予想されるように、普段我々が経験する国際会議とは多少趣が異なるものであり、運営の面でも苦勞のあとが見受けられた。同時通訳があったとはいえ、海外からの招待講演のほとんどが英語で行われ、また最新の高度な研究成果が発表されたことから、専門的知識のない人にとっては難しい面もあったかもしれない。しかし全体としてこのフォーラムが円滑にしかも成功裡に行われたのは、実行委員会やスタッフの方々の献身的な努力によるものであり、そのご苦勞には頭が下がる思いだった。

これまで金属・鉄鋼の歴史に深く関わる機会のなかった筆者にとって、このフォーラムは、松江の町の面影とともに、様々な意味で印象深いものとなった。技術が長い時を経るうちに埋没し、あたかも不連続に発展したかのように見えることは衝撃的であった。その時代の技術者達が、その時代に「いま」を生きるために努力した成果を「今」の視点で振り返っているものがこの「金属の歴史」であるとするならば、「いま」を生きる我々の成果が時代を経て「発掘」されたとき、人々はそれにどのような意味を見いだすのだろうか。悠久の時の流れの中で、「いま」何をなすべきかという問いかけが心に残った。